

大障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合
大阪市天王寺区
東高津町7 11
府教育会館704号
(TEL)6765-8904
(FAX)6765-8905

安倍政権の下での改憲は許さない!!

野党と市民の共闘のさらなる発展を

2017総選挙の結果について(談話)

大阪府立障害児学校教職員組合

執行委員長 戸田勝浩

10月22日投票で行われた第48回総選挙で、自民党は284議席、公明党は29議席を獲得し、自公合わせ3分の2を超える議席を確保しました。一方、安保法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合(以下、市民連合)と、7項目、安倍政治の下での憲法9条改定は認めない、安保法制・秘密法・共謀罪は白紙撤回などの政策合意を結んだ立憲民主・共産・社民の野党3党も健闘しました。北海道・東京・新潟・長野・大阪・高知・沖縄などで統一候補が小選挙区で勝利するなど、立憲55・共産12・社民2議席を獲得し、3党全体で前進しました。

また、「憲法9条改憲」「安保法制容認」を掲げていた希望は50議席、維新は11議席にとどまり、それぞれ公示前より議席を減らしました。

まともな審議せず解散を強行

今回の総選挙は、安倍首相と与党が9月28日に召集された臨時国会の冒頭で、何の審議も無しに衆議院の解散を強行したことで行われました。そもそも野党が臨時国会開催を要求したのは、「森友学園」への国有地格安払い下げ疑惑や、「加計学園」の獣医学部開設をめぐる疑惑が全く解明されないまま、6月に通常国会が閉会し

市民と野党の共闘が与党を追い詰める

総選挙目前になって、最大野党だった民進党の一部が、戦争法を容認し、憲法9条改憲をすすめる、希望の党へ吸収されるといふ、共闘への分断が持ち込まれました。希望の党は「維新の会」と談合し、小選挙区で競合しないよう「棲み分け」まで行いました。両党は改憲や戦争法に関して、安倍政権の基本方針と変わらない補完勢力であることは明確です。今回の選挙では、戦争法を違憲だと批判し、首

安倍政権による明文改憲を許さない運動を!

今回の総選挙によって、安倍政権は引き続き強固な権力基盤を手に入れたことになりました。22日夜には、改憲について、できるだけ多くの方に賛成していただけるように汗を流す「憲法審査会」に各党が案を持ち寄り、建設的な議論

相がすすめる改憲阻止を掲げた市民と3野党の共闘「改憲勢力」が対決構図となりました。

出口調査の結果によると、無党派層の43%が、比例代表の投票先に3野党立憲31%・共産10%・社民2%を上げました。10月23日「毎日」もまた、「市民連合」と政策合意を結んだ野党統一候補が、全国各地で与党候補に競り勝ち、市民と野党の共闘で議席を大きく増やしたことは、日本の政治の未来に展望をひらくものとなったと言えます。

今度の総選挙によって、安倍政権は引き続き強固な権力基盤を手に入れたことになりました。22日夜には、改憲について、できるだけ多くの方に賛成していただけるように汗を流す「憲法審査会」に各党が案を持ち寄り、建設的な議論



書記局のひとりごと

7月の九州北部豪雨昨年4月の熊本地震発生から6年7カ月の東日本大震災など、災害が相次ぐ日本では、被害を最小限に抑えるための対策が不可欠です。また、復興に向けて努力を続ける被災者を、継続して支援することも重要です。

九州北部豪雨の被災地では、千人以上が仮設住宅などで暮らしており、熊本地震の被災地でも4万人以上が避難生活を余儀なくされています。東日本大震災では、今も約10万人の被災者が避難生活を続け、原発事故による福島県内外への避難者は6万人以上です。これだけ多くの人が、災害後も生活基盤を奪われ、苦難に直面しているのです。

しかし、熊本地震の被災地では、医療費負担免除への国の支援が9月末でなくなりました。東日本大震災の被災地でも、国の支援や復興策の打ち切り・縮小がすすめられ、原発被害をめぐる画一的な「線引き」や「切り捨て」が大問題となっています。

支援を必要としている被災者に対しては、その声に応える施策をすすめるなければなりません。建築費が高騰している現在、住宅再建のためには、被災者生活再建支援法の支援金を少なくとも300万円から500万円に引き上げ、対象を、半壊などに拡大することが求められています。地域の雇用を担う中小小売業者の事業再建や、農地補修、畜舎・漁港の再建などへの支援も欠かせません。

自民党が総選挙の公約に掲げていた「国土強靱化」は、従来からの大型開発が中心で、地域の災害への対応力を一層弱めることが危惧されます。被災地の苦難に政治が真剣に向き合い、従来の枠組みを超えた対応が求められます。

先輩の経験と生き方に学ぶ

堺・泉北・泉南ブロック学習会

ブロック別学習会
シリーズ

今年の夏も大障教のとりくみとして、ブロック別に集まって学習会を行いました。大障教ニュースで各地の様子をシリーズでお知らせしていきます。

第1回目は、堺・泉北・泉南ブロックです。

7月30日、サンスクエア堺にて堺・泉北・泉南ブロックの学習会を行いました。参加者は17名。6つの分会から新任・中堅・ベテラン・OBと子どもももって多彩な参加者でした。

今回は一緒に実践してきた先輩から学ぶという企画で、岸和田支援OBの片山輝世先生からは、教師を目指したきっかけとしての『八鹿高校事件』（1974年11月22日）が語られました。自分自身が生徒として生活していた八鹿高校で起こった部落開放同盟による暴力的な教育への介入と、暴力に屈せず教育を守ろうとして教師の姿から「先生たちを助けて！」と立ち上がった生徒の1人だった片山先生。命を懸けることができる値打ちのある職業だという憧れから教師の道を選んだというお話には心を打たれました。教師としては授業を大切にできたこと。そのため工夫してきた教材も見せていただき、充実したお話でした。

泉北支援の森本茂先生からは教材『ロッキングチェア』を持ち込んでいただき（実際に座らせてもらい）、生徒が時間をかけて力を出して作り上げていく値打ちのある教材を追求していくことを教えていただきました。

佐野支援の西村敬子先生からはパワーポイントも駆使して、今、私たちが大事にしなければならない視点を学びました。「子どものプライドを大切に」「本人が持っている力を発揮できるように」「子どもは本物を本能的に知っている」と大切なキーワードが次々に出てきました。「私たち教員がもっと疑問に思うことが大事」。いわれたことをそのまま鵜呑みにするのでなく、「本当に子どもたちのためになっているか？」「ねらいは何か？」と考えることが大事だということが強調されました。

参加者の感想

経験豊富な先輩方でも同じように悩んでいたりしたこと、ホッとしました。また、「どう工夫すればよいか？」や、授業の進め方など、すく今後に役立たせたいと思えました。自己満足ではなく、生徒たちを一番に考えた授業作りを心がけていきます。

授業で感じていた不安が少し減りました。子どもたちが楽しく取り組めた教材を繰り返すことに自分自身「怖い」という思いがありました。一部の子どもには

2017年原水爆禁止世界大会（長崎）に参加して

この度、原水爆禁止世界大会長崎2017に参加させていただきました。大障教組合員の皆さまに御礼申し上げます。

私がこの原水爆禁止世界大会に前回参加したのは2004年ですので13年ぶりになります。今回の2017年世界大会は、国連会議での核兵器禁止条約採択があり、『歴史的な世界大会』であることは間違いありません。「だからこそ私は参加したかった！」というわけではありませんが、この13年間世界大会に参加できなかったこと、それ自体がリアルからかけ離れた生活を送っていたのではないかと。未だこの世界には核弾頭が1万5千発あまり存在しているということ、「世界の終わり」と紙一重であることが現実（世界終末時計は現在2分30秒前）ということをおぼろげに感じていただけではないかと思うのです。

1945年8月の広島・長崎も、確かに戦時中という特別な状況だったとはいえ、その時代の人々の生活として、その当たり前の日常があったわけで、この今現在、この日常、この頭上に核爆弾が放り込まれることと何ら変わりがない状況であったということです。被爆したのはたまたま今の私でなかったに過ぎず、ヒバクシャの方々がその身をもって語られる被爆の実相こそが私たちの真の現実であるのではないかと思うのです。

核兵器以外の大量破壊兵器はあれど、核兵器禁止条約がいうところの『壊滅的な人道の帰結』をもたらすこの兵器は、人類とは共存できません。核兵器が存在していることは、人類の存在、その未来を否定しているも同じです。たまたま自分の頭上ではなかったと述べましたが、たとえ自分の頭上ではなくとも核兵器が使用されれば、その破壊力、その量によっては世界人類の致死量に近づいて到達するわけですから、核兵器の存在を認めるといことは自らの生命の否定ということと同義なのです。速やかに核兵器は地球上から無くさなければならない、核兵器廃絶をもって初めて私たちは本当に「生きている」と言えるのであると思います。

最前線で核兵器廃絶と世界の恒久平和を訴え続けるヒバクシャの方々の行動は、エレン・ホワイト議長が「理性とハートのプロセス」と言われたように、まさに人が本当に人として生きられる世界をつくる原動力です。原水爆禁止世界大会への参加、署名活動や募金カンパや、語ること、祈ることなどこの運動に連帯することは、本当に人間らしい生を獲得するための行動であると思います。この流れを、つながりを、日々のくらし仕事の中で埋没させるのではなく、活かせるよう行動できればと思います。今大会に参加する機会をいただきましたこと深く感謝いたします。本当にありがとうございました。（北視覚支援学校分会 寄宿舎教員）

もう少しやらせたいと思う一方、「もう十分だしなー」という子どもたちには物足りないうらみと不安を感じた。また、教材を自分で作り直すこと、子どものタイプミリーな出来事を取り入れることはこれからもっと意識的に取り組んでいきたいです。なぜか焦って授業を進めてしまうので、子ども

が本当にわかってきたのか、疑って進めたいです。お話とても参考になりました。授業は何を作るかではなく、それをやることで何を学ぶのが大事かというところは私も思うのですが、なかなか難しいです。目標を達成した上で作品もすっかりしたものができればいいのですが、「そこまで

の力量が今の私にはないなあ」と思いました。もっと勉強して、もっと他の先生の話も聞いて、私自身レベルアップしていけたらと思います。

今日は中身の濃い話をたくさん聞かせていただきありがとうございます。成り上がったと思える授業の積み重ねや『授業作りの視点』を伝えていきたいです。